

『おいしいメイドの育て方♥』

著：森本あき

ill：樹 要

「失礼します！」

湊は、四時ぴったりに信明の部屋をノックして、中に入った。待っていたのだろう。信明がくると椅子ごと振り返る。

「隣の部屋」

長いセンテンスをしゃべるのが、そんなにいやなのだろうか。信明はそれだけ言うと、左手を指さした。パソコンやスクリーンに気を取られていて分からなかったけれど、ここはスイートルームになっているらしい。こっちは仕事部屋で、向こうは自分の部屋なのだろう。

「入るんですか？」

「ほかに、何が？」

どうしてこんなに短い言葉しかしゃべらないのだろう。だいたい、それだけでいろいろ分かれ、という方がおかしいのだ。

むかつくけど、雇い主には逆らえなくて。湊は左側についているドアノブを回した。中は真っ暗で、一瞬立ちすくむ。

すぐに信明が続いたらしく、明かりがついた。八畳ぐらいの部屋。中央にベッドがあって、あとは小さなテーブルと椅子があるぐらいで、生活空間らしい感じはまったくしない。眠るためだけにあるのかもしれない。

どうしてこんなところに来させられたのか、疑問に思いはじめたころ。

「服、脱いで」

「え？」

何かの聞き間違い？ じゃなければ、どうしてここで服を脱がなければならないのだろう。

「きみは、聞き返すことが多いね。さっきも聞いたような気がするけど、耳が悪いとか？」

「いえ、そうじゃないですけど」

湊はぶんぶんと首を振った。聞き返すのは、意外なことばかり言われるからだ、という可能性に信明は気づいてないのだろうか。

「あの、服を脱ぐように言われましたか？」

「そうだけど」

「何のために？」

どうして、こんなシチュエーションで服を脱がなければならないのか、全然分からない。

信明はおもしろそうに湊を見た。

「何のため？ そのくらい、分からない？」

「分かりません」

湊は正直に答える。信明は指を一本立てた。

「人が服を脱ぐときは、まず、お風呂に入るとき」

それから、二本目。

「次に、着替えるとき」

最後に、もう一本。

「あとは、セックスするとき。どれだと思う？」

お風呂には、ここでは入れない。着替えるにしろ、洋服は自分の部屋だ。ここで服を脱ぐ意味はない。

消去法だと恐ろしい答えが出そうだったので、湊は違うことを考える。

もしかして、あまりにも着古したものを着ているから、新しい洋服をくれるのかもしれない。それでサイズが合うかどうか知りたいから、とか？

自分でも、そんなはずはないよなあ、と思う。だったら別に、わざわざ脱がなくてもいい。洋服をくれて、合わなければ捨てていいよ、とでも言えばすむ。

考えれば考えるほど、怖い方向へ、進んでいく。

「選択肢(し)は、三つしかないんですか？」

「じゃあ、きみはほかに、どんなときに裸になると思う？」

さっきまでの無表情な様子とは打って変わって、信明は楽しそうだ。湊は急いで頭を回転させる。裸になるとき。セックス以外で裸になるとき。

「あ、日焼け！」

焼きたいときには、裸になる。そう答えたら、信明は感心したようにうなずいた。

「朝の四時に日焼けねえ。おもしろいけど、却(きゃっ)下(か)」

「じゃあ、あの…」

「答えが分かっているのに引き延ばすのは、あまり利口とは言えないな」

信明が一步近づいてきた。反射的に、湊は後ろに下がる。

「ベッドルームで、裸になれ、と言われたら、答えは一つしかないだろ？」

また一步。近づかれるたびに、湊は後ずさる。一步。大きく後退。また一步。後ろに下がる。そうしたら、ベッドに足が当たった。

「素直に脱ぐ？」

「いやですっ！」

湊はぶんぶんと首を振った。

おかしい。こんなの、絶対におかしい。

何で、男の俺が、男の信明相手にセックスしなきゃいけないわけ!?

それとも、実は男に見えるけど、信明は女とか!?

そんなわけあるはずなのに、とにかくこの状況をどうにかしたくて。

湊は頭の中で、ぐるぐると考える。

「まあ、そうだろうね」

信明はあっさりとうなずくと、腕を組んだ。

「ぼくだって、同じことを言われたら抵抗する。普通の状態ならね。だけど」

組んだ腕をほどくと、右手には小さなスプレーが握られていた。

「普通じゃない状態なんて、いくらでもあるしね」

逃げなきゃ、と思って足を踏み出したときには、もう遅かった。顔にスプレーが吹きかけられる。崩れ落ちそうになる体を必死にこらえて、また逃げようとした途端。

世界が反転した。

なぜかは分からないけど、倒れてしまったらしい。手を動かそうにも、ぴくりとも動かない。足も、首も、関節という関節が、自分の思い通りにならないのだ。

「どうせなら、ベッドの上に倒れてくれればよかったのに」

信明は面倒くさそうにそうつぶやくと、湊の体を抱(かか)え上げた。そのまま、ベッドの上に降ろす。

「しゃべれるし感覚もあるけど、体が動かなくなるんだよ、このスプレー。速効性だし、悪い人たちに襲われたりしたときには便利だね」

信明は微笑んだ。

「あとは、本気で抵抗しそうな相手とセックスするときとか？」

「な…んで」

舌も少ししびれている感じで、がんばらないと言葉を出せない。

何で、こんなことをされなければならないのか。

一番聞きたいそのことをしゃべるにも、気力がある。

「こんな…こと…」

「さあね」

信明は目を細めた。

「そんなこと、きみは知らなくていいんだよ。でもまあ、理由があるっていうのなら」

信明は言葉を切って、湊を見た。

「きみがぼくを覚えてないから、っていうのは、どうかな？」

覚えてない？

俺が、こいつを？

だって、こんなやつ知らない。見たこともない。

人生で、一度たりとも出会ってない。

いくら何でも、見かけだけはいいけどこんなに性格の悪いやつ、一度会ったら忘れない。

じっと見ると、信明はにっこりと笑って湊を見返した。

叫びたかった。叫んで、蹴(け)ったり殴ったり、抵抗しまくって、いますぐここから出て行きたかった。なのに、体はまるで自分のものじゃないかのように、ベッドの上に横たわったままだ。

信明は湊の頬をすっと撫でた。体は動かないのに、その信明の指の感触だけははっきりと伝わってくる。それが分かったのか、信明は笑った。

「楽しめそうだね」

その言葉に、噛みついてやりたくて。でももう、舌を動かすのもだるくて。  
湊は信明をにらみつけた。信明がそれを見て、声を出して楽しそうに笑った。

本文 p67～74 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>